

平成 19 年度

波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査

現地説明会資料

かみ の むら

上ノ村遺跡



(3 地点南東より撮影)

2008. 2. 24 (日)

午後 2 時～4 時

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会
国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

波介川河口導流事業について

波介川は、仁淀川の支流にあたりますが上流に行くほど地盤の低い低奥型の地形であるため、大雨の際は幾度となく地域に洪水被害をもたらしてきました。特に昭和 50 年 8 月の台風 5 号による水害は流域に深刻な被害をもたらしました。

このような状況を受け、国土交通省では現在の合流点を仁淀川河口へ付け替え洪水時において仁淀川からの逆流による影響を除き、波介川の洪水を安全に流下させ、内水被害を大幅に軽減させることを目的に「波介川河口導流事業」を行うことになりました。

I 調査の概要

1. 発掘調査名

平成 19 年度 波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査 上ノ村遺跡発掘調査

2. 発掘調査の目的

波介川河口導流事業計画区域内における事前の試掘確認調査を実施し、計画地内に所在する埋蔵文化財の中で工事により影響を受ける部分について記録保存のための発掘調査を行うとともに平成 17 年度以降の発掘調査出土遺物等の整理作業及び報告書作成を行い、埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

3. 事業主体

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

4. 調査主体・実施機関

高知県教育委員会

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

5. 調査場所

高知県土佐市新居上ノ村（図 2 上ノ村遺跡位置 1 参照）

6. 調査協力

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

土佐市教育委員会

7. 調査地点・面積・各調査区調査時期

調査地点名	調査面積㎡（延べ）	調査期間
地点 1-3 拡張区	1,000㎡	平成 19 年 4 月～ 7 月
地点 1-4	1,900㎡	平成 19 年 4 月～ 6 月
地点 1-5	1,150㎡	平成 19 年 11 月～ 20 年 2 月
地点 3	11,730㎡	平成 19 年 6 月～ 20 年 2 月
地点 4	400㎡	平成 19 年 9 月～ 11 月
地点 6	400㎡	平成 19 年 8 月～ 11 月
旧堤防	150㎡	平成 19 年 11 月

調査総面積 16,730㎡

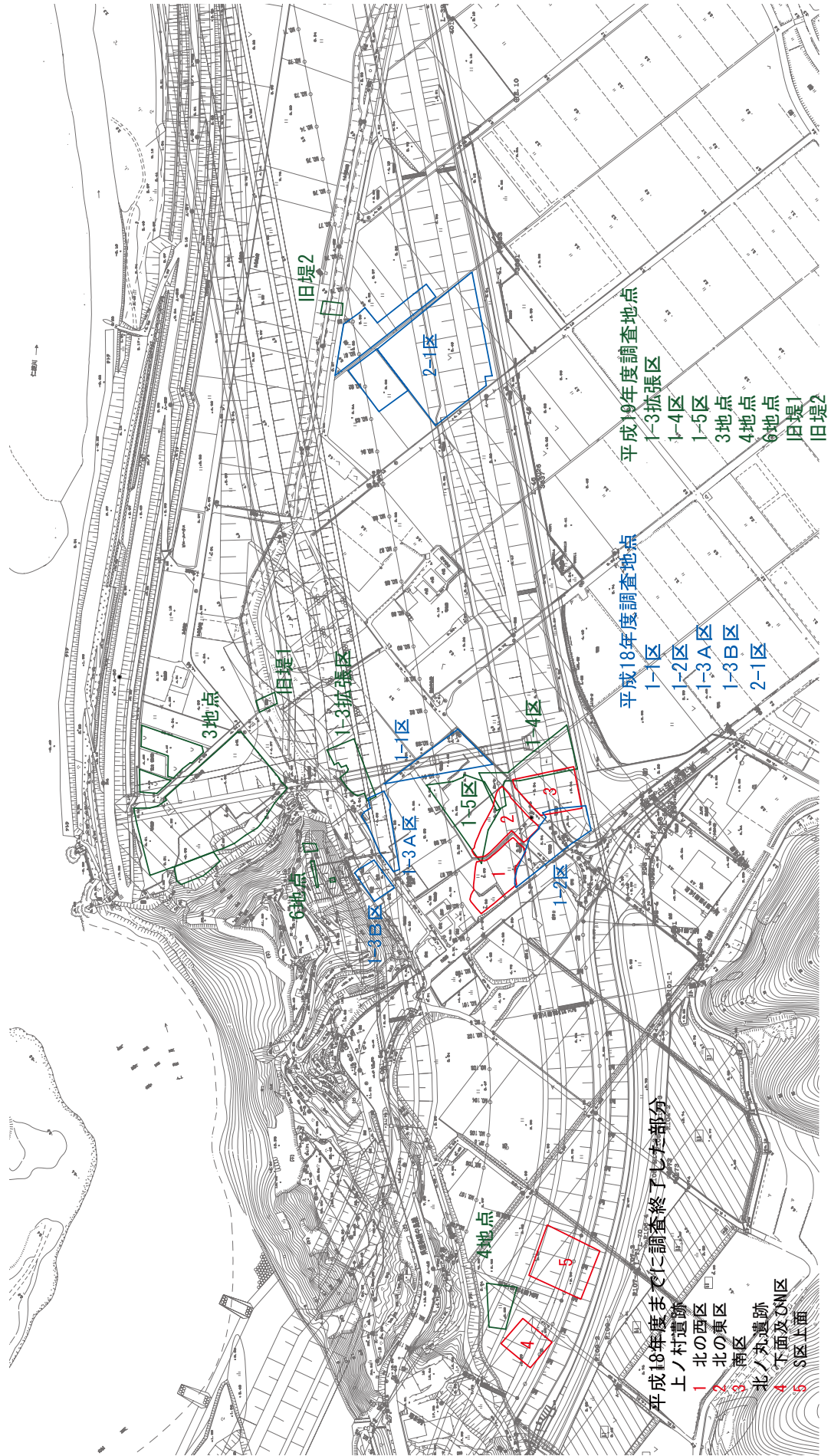


図1 これまでの調査を行った場所と本年度の調査区

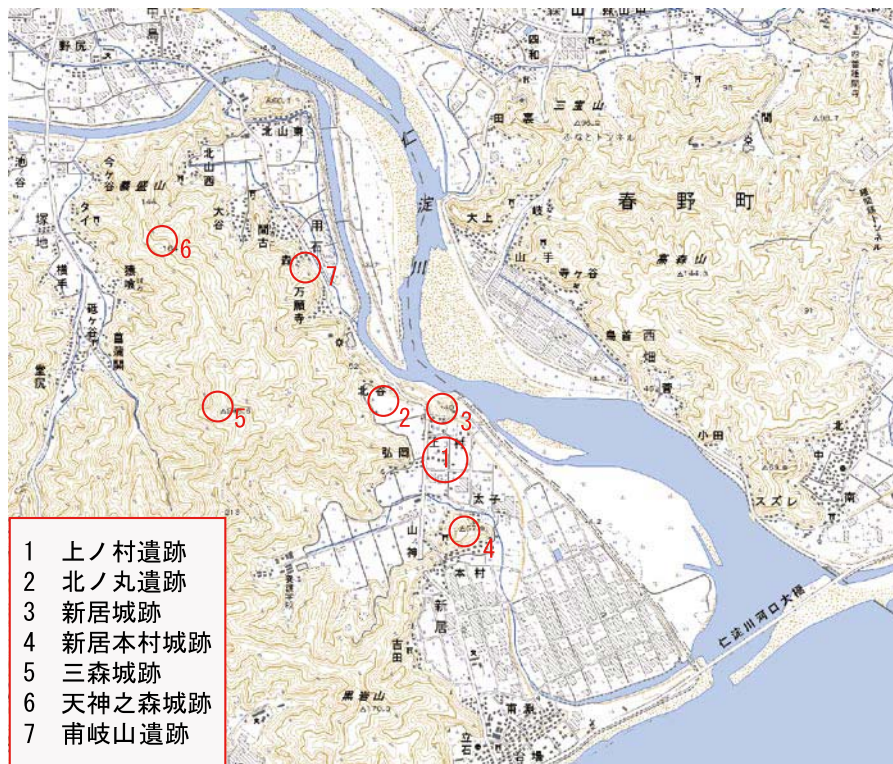


図2 周辺の遺跡

II これまでの調査

平成16年度 北ノ丸遺跡 (図1 調査区位置図4・5)

古墳時代(6世紀後半)の木器が多く出土。

低湿地に立地することから多量の木製品が良好な状態で出土しています。古墳時代(6世紀後半)の田下駄や建築部材とともに貴人が用いたと考えられる衣笠の一部や槽作りの琴などが出土しています。このような希少な木器が出土することは、当地域が古墳時代から重要な地域であったことを示しています。

平成17年度 上ノ村遺跡 (図1 調査区位置図1～3)

古代(8世紀～12世紀)、中世(13世紀～15世紀)の遺跡と考えられます。

中国産の陶磁器や京都、大阪などの近畿や東海地方など高知県以外の地域で作られた陶磁器が多く出土しています。また、役所などで使われた緑釉陶器、黒色土器なども出土しています。河口に近く、仁淀川、波介川の合流地点である立地からみると水運に関わる重要な場所であったと考えられます。

平成18年度 上ノ村遺跡 (図1 調査区位置図青字部分)

平成17年度、本年度の調査区と隣接し同じ上ノ村遺跡の一部です。

弥生時代の遺構・遺物が確認できました。

古代(8世紀～12世紀)、中世(13世紀～15世紀)の遺構・遺物を確認しました。

新居城跡のすぐ下ではV字状の堀の可能性のある溝を確認できました。また15世紀以降集落が川に近い南東側に広がっていたことがわかりました。出土遺物は県外で作られたものが多く古代以来、物流の拠点であった事を示しています。

縄文時代



縄文時代包含層調査風景

3地点の城山東斜面の裾部から縄文時代晩期中頃の土器や石器などが大量に出土しました。縄文時代は、紀元前1万年以上前から紀元前1000年頃までの長期間に渡って営まれた文化であり、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6つの時期に分けることができます。一般的に狩猟や採集に生業の基礎をおいた時代と考えられていますが、最近の研究によると後期以降は稲作を含む農耕も行われていたことが明らかになっています。今回の遺物は、弥生時代の始まりを目前に控えた縄文時代最後の時期に属するものです。

遺物の多くは山腹から転がり落ちたような状況を示しているものが多く、竪穴住居などの遺構に伴ったものではありませんが、斜面を水平に削った平場や凹みからは、大きな土器片が折り重なるように出土しており、元の位置を留めているものも数多く確認されています。遺物の多さから考えて近くに集落が存在していたことは間違いありません。

土器は、主として煮炊きに用いられた深鉢と盛りつけ用の浅鉢が見られます。深鉢は口の部分に断面三角形の小さな突起が巡っていることや内面に沈線が施されているところに特徴があります。浅鉢はとても丁寧な作りで光沢を帯びるように表面が磨かれており黒色磨研土器と呼ばれているものです。これらの中には赤色顔料を塗ったものもあり、特別なマツリなどに使用されたことが考えられます。また浅鉢の中には、木葉文を浮き彫りで描いた土器も出土しています。これは、近畿地方を中心に分布する櫃原文様と呼ばれているもので高知平野と近畿との交流のあったことを示しています。これらの深鉢や浅鉢はこれまで高知平野では未発見の土器群であり縄文時代晩期の研究を進める上で重要な位置付けがなされる資料です。



縄文土器出土状況



縄文土器出土状況



石斧出土状況



縄文時代包含層堆積状況

石器は、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石錐、叩き石などの道具類が多く出土しています。これらの石器の多くは、仁淀川流域の石材で作られています。石鏃の多くは香川県のサヌカイトが使われています。また石材の中には大分県産の黒曜石も出土しており、土器とともに遠隔地との交流のあり方を示しています。石製装飾品の出土にも注目しなければなりません。勾玉（1点）、小玉（4点）が出土しています。これらの中で、勾玉と小玉の1点は、やはり他地域からの搬入品と考えられます。この他、発掘で掘り起こした土を洗ったところ動物や鳥の小骨片が多数確認されました。当時の人々の食料となったものです。当時の生活の有り様を豊かに復元してくれる資料です。

高知平野の縄文時代晩期の遺跡分布は、西部に偏在する傾向にあります。居徳遺跡が最も有名ですが、今回の資料は居徳遺跡では確認できなかった時期に属しており、今回の出土遺物の分析を通して、仁淀川流域の縄文時代晩期の歴史を更に充実させることが可能となりました。そして当該期の遺跡のほとんど確認されていない物部川流域との違いをより鮮明に描くことができます。一連の調査を通して高知平野の東と西では、異なった地域文化の展開があったことが明らかになりつつありますが、縄文時代晩期に遡ってその違いのあることがわかりました。何故このような違いが生じているのか。このことは高知平野の歴史や地域社会の形成を考える上で極めて興味深い問題です。

中世

中世については今年度調査が行われた1-3、1-4、1-5、3地点で遺構・遺物を確認することができました。調査成果を調査区ごとにみて行きたいと思います。

1-3拡張区は昨年度調査が行われ堀の可能性のある溝跡を確認した1-3区の東側にあたります。この溝跡の延長部を確認するため調査を行いました。この溝跡は南北に10m延びたのちL字状に直角に曲がり東西方向へ33m延びたのち突然終わっていることが判明し、コの字状に新居城跡の山下を囲う構造ではないことが明らかとなりました。溝の時期は14世紀代の可能性が高いと考えられ、この溝の内側と考えられる城跡直下の部分と外側とみられる部分からはいずれも柱穴を検出しています。何らかの区画を意図したものと考えられます。

1-4区では14世紀代の溝に投げ込まれた石群が検出され青磁椀と瓦質土器羽釜などの遺物が出土しています。遺構密度は低く14世紀代の集落の南限もしくは空間部分の可能性が考えられます。

1-5区については試掘調査で大きく分け2面の遺構面が確認されており本年度の調査は上面の遺構面のみで、下面については次年度調査を行う予定となっています。上面からは柱穴を約500個検出することができました。柱穴の時期は概ね近世と中世2時期(15世紀、13世紀から14世紀)に分けることができますが遺構密度が大変高く新居城跡の下に当たることからこの部分が中世の集落の中心部の可能性が考えられます。

3地点は今回の調査の中で最も仁淀川に近い調査区で小字では古津と呼ばれており川津に関連する船着き場遺構などが検出されることが期待されました。

調査の結果、13世紀～14世紀を中心とした時期と14世紀末～15世紀と考えられる中世の遺構面が2面確認でき多くの柱穴と溝を検出することができました。検出した14世紀末の溝からは完形の土師器杯・皿や常滑焼の大甕の破片などが出土しています。また床面に大きな河原石を敷き詰めた土坑なども検出しています。13世紀～14世紀の遺構では同じく溝跡、柱穴を確認しており、溝跡は南北方向だけでなく東西方向の溝も検出しています。遺物では土師質土器のほか、他地域から運ばれた常滑焼や瓦器、青磁や白磁などが多く出土しています。直接川津に関する遺構は確認できませんでしたが交易に関する遺跡である事を補完する資料となりました。



1-3区（昨年度調査）・1-3拡張区（本年度調査）合成写真

戦争遺跡

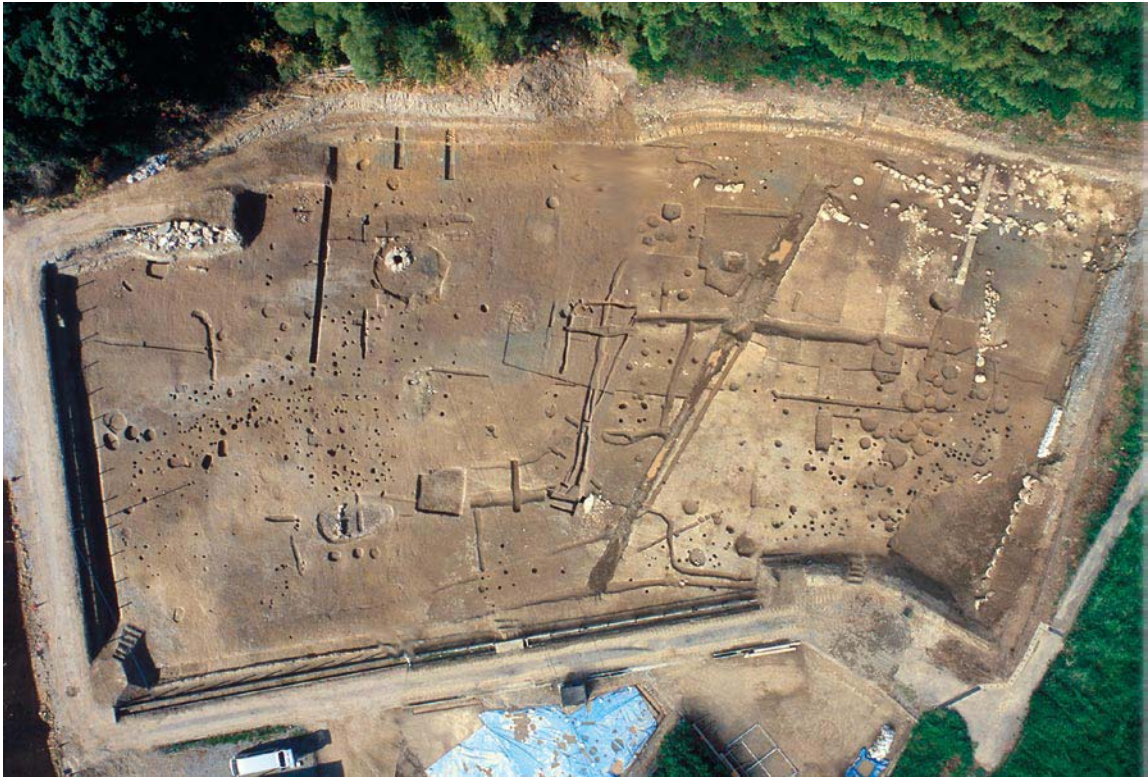


塹壕完掘状況

塹壕は、地点6、新居城の南側山腹の平坦面に設けられ仁淀川を眼下に望む位置にあります。確認延長20mで南北方向に掘られています。北は新しい建物によって壊されているので本来はもっと長かったものと思われます。少しジグザグ状に延びており、幅は1m前後、深さは最も深いところで1.2m程、壁は垂直に切られており、南端は、奥行きが70cm程横穴状に掘り込まれています。風化砂岩の岩盤をツルハシとスコップで掘っています。3本の枝線が出ていますが全体として小銃掩体を交通壕で繋いだ作りで、立地から仁淀川沿いに上ってくる敵を想定した陣地と考えられます。規模から見て一個分隊（13名）程度が展開していたものと考えられます。

太平洋戦争末期、「本土決戦」が現実問題となってきた1945年春以降、高知平野においても米軍の上陸に備える決戦準備が進められるようになります。沖縄での地上戦闘が始まった4月には、四国防衛の部隊として第55軍（偕部隊 司令部は香美市新改）が編成され約12万人の兵力が配備されますが、その大半が高知平野を中心に展開するようになります。海岸には特攻基地が作られ、海岸近くの山塊には多くの陣地が構築されました。

仁淀川から浦戸湾にかけては、4月に「満州」から移動してきた第11師団（錦部隊）の歩兵第44連隊が配備され、仁淀川右岸の新居や用石は第1大隊の担当地区となり、新居小学校には第1中隊の中隊本部が置かれていました。今回の塹壕は第1中隊によって掘削されたことが聞き取り調査によって明らかになっています。他にも周辺部には、多くの壕や陣地が作られ残存しているものと思います。戦争が終わり60年以上を経た今日、戦争の跡は人々の記憶から忘れ去られようとしています。土地に刻まれた戦争の痕跡を戦争遺跡として捉え、戦争の実相、悲惨さを伝える資料として、また日本近代史を刻んだ遺構として記録して行くことは有意義なことだと思います。



3地点下層遺構完掘状況（合成写真）



3地点 溝状遺構遺物出土状況



3地点 土坑遺物出土状況



3地点 土坑瓦質土器鍋出土状況



3地点 石敷き土坑



1-3区 下層遺構完掘状況



1-4区 焼土土坑



1-3区 掘状遺構作業風景



1-4区 土坑遺物出土状況



1-3区 柱穴土錘出土状況



1-5区 包含層出土古墳時代須恵器



1-4区 溝状遺構投げ込み石列



1-5区 上面遺構検出状況



3 地点 近世井戸跡



3 地点 縄文時代包含層完掘状況



3 地点 近世井戸跡井筒



4 地点 完掘状況



3 地点 青磁椀出土状況



4 地点 しがらみ状遺構



3 地点 遺物集中出土状況



6 地点 近代塹壕作業風景



中世の上ノ村遺跡復元イメージ図